



戦時議會

滿洲事變と國際聯盟脫退(其の一)

北 哈 吉

一 滿洲視察

僕は戦時議會を自分の観点から叙説し批判する積りであるが、支那事變や太平洋戦争は一朝一夕に突如として生じたものではなく、久しく準備されたものであるから、此等の事件の前奏曲を語らなければ、此等を理解することは出来ない。前奏曲として注目すべきものは、僕の見るところでは、滿洲事變、百靈廟事件、西安事件、二・二六事件等である。

以上の四つの事件の内、百靈廟事件については北支事變の近因たりしことは識者の認めるところであるが、僕は目下來朝の中国人からこの事件につきて詳しく報告を受けつゝあるから、こゝには語らない。又西安事件につきても、エドガー・スノーの「支那の上の赤き星」や、ジョン・ガンサーの「アジアの内幕」、ハーバート大学の支那学主任教授フエーアバンクスの終戦後の「支那と合衆國」等に依つて大休を知つてゐるが、張學良の元參謀長であ

つて西安で蔣介石の監禁を張學良に献策した苗劍秋君が目下來朝して居り、近く私が会談する予定になつてゐるから、もつと事件の真相を研めてから、発表する機会があらう。従つて、日支事變の前奏曲としては、滿洲事變と二・二六事件にのみ限らうと思ふ。そして滿洲事變についても著作論文等が多いから、私は之が記述を省き、自分が直接見聞した國際的緊迫感、特に昭和七年秋から連盟脱退までの光景を簡單に描写することにする。

滿蒙問題については、僕は昭和二年

「昭和維新」といふ著作に詳細述べて居り、功罪共にこの一書にあるから、こゝには繰り返さないが、僕は滿蒙に於ける日本の權益は支那から取つたものではなく、支那がロシアに奪はれてゐたものを、日露戦争の結果、日本がロシアから取つたものであるから之は日本の生命線として死守する必要があり、日本がこゝから退けば、ロシアが進出することが必定であると觀察してゐた。しかし、滿蒙を独立させて地圖を奪へて了つて、日本の傀儡國にするなどゝは考へてゐなかつた。之は前記の著作に明瞭にしてある。

事變は昭和六年九月十八日に起きた。その後元「朝日」の記者で朝鮮問題の研究者故細井肇が、朝鮮の全鮮時局大会を代表する渡辺、岩永両君と安東東商業會議所の荒川君と相愛会の理事朴春琴(後代議士となる)とが朝鮮在住の内鮮人の意見を述べたいから、上野の無私菴といふ支那料理屋に集ま

つてもらいたいと電話があつたので、

行つて見ると、小泉策太郎、丸山鶴吉、中野正剛、篠田中将、下中彌三郎、黒竜会の葛生久、小幡等の諸君が見へてゐた。朝鮮人虐殺の万宝山事件や、中村大尉虐殺事件が話題であつた。殊に張學良が中央の蔣政権の青天白日旗を掲げて、化外の地たる東三省を名実共に中央政権に帰属せしめる危険があるとの話があつた。そうして、滿蒙權益擁護並びに在滿鮮人の保護の演説会を東京で催すことゝなつて、僕も二二個所出演した。恰も滿洲視察から歸つた元參謀總長鈴木大將が北君も此の際滿蒙を視察してはといふ勧めがあつたので、南陸相と新聞班長某大佐に會つて紹介状を貰つて、始めての滿蒙視察に出掛けた。旅費は自弁であつたが、船や旅館は二割引きで、滿鉄のバスは貰つた。現滿鉄の協和会や旅順工科大や奉天の全滿日本人大会や演説させられ、滿洲日報社長の故松山常次郎氏や遼東日報社長の阿部君やらに

招待され色々話しを聞いた。

僕は遠くハルビンに行き、こゝからチ、ハルに行かうとしたが、馬占山との戦争で不可能となり、更に四平街に引き返し、チ、ハルに出で、多聞師團長にも會つた。奉天では旧知の総領事の林久次郎君とも會談した。この他軍人では森獨立守備隊司令官、同樋口參謀(後中将)関東軍三宅參謀長の參謀石原莞爾中佐、花谷少佐等に會つた。視察約一ヶ月で大連から、上海に出た。船中では渡左近少佐(後中将)、川島芳子等と船長テンプルを占めた。上海では時局対策委員会で、滿洲視察談をやつた。名物男の田中隆吉少佐等にも會つた。

二 視察後の感想

視察の結論としては、日本の滿蒙の權益を死守することには大賛成であつたが、之を獨立國とすることなどは考へなかつた。当時の日本軍部にもこんな考へはなかつたようだ。之は翌年の

秋のゼネバで日本代表が彼たゞきに遇つて後の窮余の窮策であつたと思はれた。之は僕がゼネバに於ける松岡全権の態度に依つて、明かに看取したところである。

僕は当時、満洲の重工業と、鉄道と旅順大連の港湾さへ握つて、国防の第一線を黒竜江と定めれば、日本々土は素より朝鮮の国防も全いから、満洲国は支那の地方政権で沢山であると考へてゐた。陸軍がソ支両国を仮装敵国として大陸政策を行ひ、海軍が英米を仮装敵国として南進策を講ずれば、資源の貧弱な貧乏国は結局行き詰ると思惟した。第二次大戦前のソ聯とドイツは陸軍に主力を注ぎ、海を隔てた英米両国は海空軍に重点を置いて居り、何れの強国も陸、海、空の三軍を整備し得る国はない。フランスとイタリイは陸、海、空の三軍をバランスの整うてゐる情態に保たうとして、三軍の何れもが二流であつたのに、日本が外交方針を確立せず、周囲の各国を仮装敵国とし

経済、統制経済を強化したから、日本は結局、ソ聯を研究しつゝ、ソ聯化したといへるのである。支那支那より太平洋戦に至る間に企劃院に赤色分子が多数入り込んでゐたのは、今日共産主義者として名乗りを擡げてゐる連中が、一度は企劃院で飯を食つた前歴を有することに依つて明瞭である。故尾崎秀実が近衛の獅子心中の虫となつてゐたことはその顕著な実例である。国防國家を無理に建設しようとするれば、共産主義かファツシヨかナチスかの何かれかの全体主義に必然に走らざるを得ない。デモクラシイ、自由主義は国防偏重の國家や極端な貧乏國家には絶対に発達しない。満洲事変以来の日本は外交上無方針の爲めに、多くの仮想敵國を作り、民間生活を抑圧し、国防國家を作り、この国防國家が戦争を誘發し、この戦争が長期化すると共に、殆んど共産主義体制にまで進展した。近衛が第三次内閣を辞した後、自分は知らず知らず、共産主義にかゝつてゐたと陛下

て整備すれば、財政的に行き詰り、一朝事ある時は、國民は窮乏に陥るのみと心配してゐた。勿論、満洲の重工業地帯を失へば、朝鮮の守りは不可能となり、朝鮮が敵性國家の支配下に入れば、日清戦争前の日本國に返り、而も兵器の發達せる今日、日本は累卵の危きに陥る危険がある。日英同盟当時の日本の外交は日英相談で事を運ぶから英國に對して分が悪くとも、外交上一定の方針があつたが、濠洲や米國の策動で大正十一年の華府會議の結果日英同盟が解消した後は、日本の外交は北進か南進か、大陸政策か、海洋政策か見当がつかず、左支右吾、酔つ拂ひ外交になる憂があり、北支事変以来、之が実践された。三国防共協定は對ソ策と思つてゐたのに、いつしか、日ソ中立条約を結んで、この協定を對英米策に用ゐるなどいふ不徹底があつた。日本は佛伊兩國同盟、一等國の実力なくして、三軍を整備せんとしたから所謂国防國家などいひ、遂にソ聯

へ上奏したのも、当然である。(三田村武夫著「戦争と共産主義参照」。日本國の国防の利器たるべきものが、日本の亡國の兇器となるに至つたことは明瞭である。僕が雑誌「祖國」で軍人と官僚の國家社會主義的傾向を不斷に攻撃したが、実は社會主義どころか、軍人や官僚の一部が、國防國家の名の下に共産主義にさへ深入りしてゐたのである。

三 加州滞在

満洲事變の翌年所謂五・一五事件が起つた。この事件は僕は何も知らなかつた。親友故牧野虎雄画伯と新宿の小料理屋で酒を飲んでゐた時、号外で知つた。翌日新聞で詳細を知つたくらいのものである。此の時は二度目の外遊の準備中であつた。當時僕は「帝國美術學校」と「帝國音楽學校」を校長として経営してゐたので、一は歐米の芸術教育を研究し、一は満洲事變後の國際情勢を視察する積りであつた。

を國防國家の範となすようになり、滿洲には資本家入るべからずと禁制の札を立て、重税と公債で、換言すれば國庫の費用で、滿洲を経綸するようになつた。斯くて滿洲は關東軍の天領の如く、政府の干渉を容れず、國民の声を聴かなかつた。僕は滿洲視察の時既に、石原、花谷兩參謀の言に國家社會主義的言論に接して、將來を憂ひた。多聞中將すらこの傾向に賛成の説を僕に述べた。僕は滿洲の權益擁護には熱烈に賛成したが、後の滿洲經營の方向には甚だしき反感を有し、北支事變以来三度も支那に行つたが、遂に滿洲へは事變の年以後一步も踏み入らなかつた。日本を安全ならしむべき滿洲が日本を亡ぼす原因ともなつた。北支駐屯軍が北支に事を起し、全支に事變が拡大し、更に太平洋戦を起したのも、關東軍の羽振りのよいのを見て、北支駐屯軍が羨やましくなつたのが、原因であり、更に國防國家建設の爲めに、ソ聯の共産制度に近きまでに所謂、計劃

友人連が僕の爲めに丸の内の中央亭で盛大な送別会を開いて呉れた。前記兩學校の教授連の画家や音楽家が多数集まつて呉れた。又「祖國」の寄稿家の故中里介山、故中村吉藏等の文壇の大家も出席して呉れた。満洲事變後約八ヶ月の後であり、五・一五事件の直後であつたから、所謂多数の國士、軍人等が集まつた。故田中舍身居士、故木田國粹會關東本部長、大日本正義團々長酒井榮造、政教社々長故五百木良三、奥平陸軍中將、河原海軍中將、匠壁海軍少將、福田海軍少將等が主なるものであつた。変り種では三菱の常務理事故青木菊雄氏、官吏の故大塚惟精氏等も見えた。青木さんは私は生涯にんな珍らしい会には始めてだと述べられた。アメリカ行の船は故平尾鈞三郎氏と同じテールであつた。大正七年第一回の渡米の時はシャトル航路であつたが、今度はハワイ寄港で、桑港経由ロサンゼルス着であつた。ハワイへ着

いて驚いたことは当時成蹊高校校長浅野孝之君が元ハワイ中学校長であつた縁故で、手紙を出して置いて呉れたので其地の教育界で歓迎して呉れ、波止場でハワイ独特の濃厚の色彩の花の首輪を付けて呉れ、小山の上の日本料理屋で、禁酒時代にも拘はらず、土ビンに入れて日本酒を御馳走して呉れた。ロサンゼルスに附くと、先着の浅岡信夫君等多数の在米同胞が迎ひに来てゐた。恰もオリンピック大会がロスで行はれるので、数日をその見物に過ごした。

アメリカでも満洲事件の是非の論が喧ましかつたので、柔道家の太田節三君や浅岡君等の胆入りで、羅府新報主催の「満洲問題是非か」の論題で、先にロスに来てゐた大山郁夫君と立ち会ひ演説会を催すことゝなつた。先に僕が一時間、後に大山君が一時間、最後に僕が三十分といふことで演壇に立つた。僕は満洲で軍人のやつてゐる事を万事は肯定しなかつたが、日英同盟の

ない今日日本単独で自國の安全を期する爲めには、満洲の交通機關と港灣と重工業地帯とは日露戦争の獲物であるから、此等は飽く迄も確保する必要がある、張作霖時代満洲は特殊地域であつたから、こゝに飽くまでも親日政権を存立せしめ、日本の權益を擁護する必要がある。若し旅大回収などいふ不当の要求を持ち出して、日本の權益を侵害するならば、条約上の権利として自衛の爲めの出兵も止むを得ない旨を主張した。我々は北清事変に乗じてロシアが南進して旅順大連を把握した歴史を忘れてはならぬと演説した。然るに、大山君は日露戦争に依つて獲得したのなら、例の公式論で資本主義的帝国主義の侵略行爲であると極端論をやつたから、聴衆の共鳴を獲なかつた。しかし、大山君は早大当時の僕の先輩であり、大学の同僚として久しく懇意にしてゐたから、議論の攻防共に礼儀を失はなかつたから、聴衆も模範的公開討論であつたと評した。それで

も一部の共産黨員は僕の演説を妨害したので、後、日本で有名になつた川端文子のおとうさんが部下を率ゐて制裁を加へたので、二三人入院する騒ぎが持ち上つた。演説後大山夫妻がパサデナのビン君(元在日宣教師)方の僕の宿まで送つて呉れた。羅府新聞主催で大入満員であつたから、僕も大山君も千円づゝ貰つた。僕も渡欧の前で路銀も不足してゐたので多少の役には立つたし、大山君も窮乏してゐたから、喜んでやうである。僕は大山君に「二人で八百長で満洲問題是非かで立会演説で少々儲けやうか」と誘つて見たが、同君は微笑するだけであつた。僕は外に二三ヶ所単独演説して、旅費の足しにはなつた。一夕僕はその金で太田君と浅岡君を招いて、日本式料理で、米人の查公に監視して貰つて、禁酒時代ながら、徹夜で日本酒三十本平けた。一本日本金七円で二百円ばかり拂つた。日本では一円二十銭だから、高いなと思つた。折柄オリンピック開催中

であつたから、ロスは御祭り気分であつた。民間には御祭気分溢で満洲問題などは一時吹つ飛んでゐた。僕は此の地に滞在在中色々の在留同胞と知り合ひになつた。加州第一の豪傑佐々木武行君帰朝後僕の勧誘で入党した自由党代議士安部俊吾君等は出色である。加州各地を見物し、メキシコにも進出した。して、二月後半ビン君の所に宿り、單身ニューヨークへ向けて出発した。

四 シカゴ

車中のブルマンカーでは各種の米国人に会つた。僕は前後三回渡米したが、旅行はいつも単身である。米国人の誰彼に会ふて米人氣質を知るに便利がよい。ロスよりシカゴに行く車中はオリンピック帰りのアルゼンチンの選手連と一緒にあつたが、話が仲々賑はつた。老年に近い車掌が僕に近づいて「車中の日本人は独り旅の時は車の隅に小さくなつて居るのに、貴君だけは牧師のように説法してゐるではないか

」といつたので、僕は「東京では文章と演説で渡世して居り、又大学でも教へてゐるのだから、アメリカでいうと説教家見たいのものだ」と答へたら、なるほどうなづいて、それでは金が儲かるだろうといつた。その内シカゴの弁護士だといふ中老の紳士と会つた。盛んに満洲問題を論じ立てる。結局日本は満洲を欲しいのだからうといふ。僕は満洲は支那本土と違つてゐるので、住民はセパレーション・ムーヴメント(分離運動)を起したので、結局はオートノミー(自治)を求めるので、日本が治安維持上之を援助するだけであらう。僕は民間人だから、政府や軍部の其の腹が解らぬが、あんな所を取るのではなくセーフティ(安全)とプロスペリテイ(繁栄)を求めるのだからと答へた。彼は要領よく相繼ぎを打つた。「それなら分る。不戦条約は侵略を禁止してゐるが、住民の分離運動、自治運動で、日本が安全と繁栄とを求めると之を援助するだけならば、

この条約に矛盾しない」と。僕も此の問答にヒントを得たので、満洲事変は斯く弁護するに限る。又日本も此の限定を踏まないように警戒するに若くはないと、自分の考へが定まつた。

シカゴは日本料理屋に泊つた。加州以外で欧米で日本料理屋に宿つたのは稀有の例外である。偶然ゼネバに行く影佐陸軍少佐(後中将)が同宿してゐた。僕は前年の十月事件の關係者だといふこと、陸軍省の支那班の者だといふことは、知つてゐたが、会つたのは始めてだ。彼は僕のことを相当知つてゐたようで、十月事件の打ち明け話をして呉れた。彼とは其の後懇意になりパリでは北白川宮妃殿下用の買物に行くといふので、「گران・マガザン」(大百貨店)へ案内して行つたし、ゼネバの国際聯盟の会議には同じホテルにゐたし、帰朝後は故北白川宮殿下の偕行社に出す始めての論文を頼まれて訂正もしてやつたし、僕が昭和十四年春海南島へ視察(この時は代議士とし

て)に行く時は、今田新太郎といふ聯隊長へ紹介もして貰つた。

五 ニューヨーク滞在

シカゴの弁護士に晚餐を御馳走になつて、ニューヨークに向つた。便利がよいから、二流であるが、ペンシルヴァニア・ホテルに入つた。当時新渡戸博士がコンモドール・ホテルに滞在してゐた。毎日新聞通信員の某君(姓名は忘れた)が来て、先生のホテルで飯を食つて話し合ひたいといふことで、初対面ながら、すぐ応諾した。僕は先生が満洲事變のことをどこかで演説して軍にいらまれ、後に例の相沢中佐に斬殺された永田軍務局長に強要されて渡米して満洲事變を釈明することになり、之を在米同胞に知られて不遇であることを聞いてゐたので大に同情してゐた。思想は僕とは相当隔たりがあるが人格と教養は大に尊敬してゐたので、先生に遇うことは嬉しかつた。食事中米國人の反日熱について先生から

色々承つた。排日の中心が理想主義者の多いポストンで、先般ローウェル総長がラヂオ放送で、日本島をポイコットする手始めに、全米の婦人は日本の輸入にかゝる絹の靴下を用ゐるべからずとまでいつたとの話であつた。そこで僕は近くポストンへ行き、学生時代数回お目にかゝつた総長に会つて満洲事件の事を話さうといつたら、先生は「自分が既に話したし、靴下のポイコットは言ひ過ぎだと木人も自覚してゐるようだから、再び刺戟しないがよい」と注意された。食事中に先生が色々の話をされたので、僕は故西田博士と横浜から名古屋まで二人で話し続けた記憶と相並ぶ、日本人の最高の教養ある人物の記憶となつてゐる。昭和四年三度目の渡米の時は、バンクーバーの先生の記念碑を詣つて、弔意を表した。

ニューヨークでは堀田謙介君が総領事であつた。之も初対面であつた。併し同君が宿つてゐたバリの宿の娘が僕

命なきものと思へと呼んだので、この氣狂ひは摘み出された。

後堀内君にあつたら、日本としては北君のように介明する外はないのとどこであつた。そうして日米協会の会長グリーン君を紹介する爲めに、僕を屋簷に招待した。後堀田君は三度目の僕の渡米の際は大使であつて、僕は藤原銀次郎氏と一緒に大使館で招待された。偶々広瀬豊作君が紐育にゐて、僕を招いて、或る婦人に紹介した。広瀬君は満洲事變について、この婦人は合点が行かぬといつてゐるから、北さんから説明して呉れといふので、例の調子で説明したら、多少納得したらしいので、広瀬君も喜んでゐた。何せよ、半年前に満洲を視察して来た現地報告であるから、相手は信用して呉れる。

紐育滞在中三菱の青木菊雄氏の紹介でコロンビア大学の角田柳作君に会つた。同君は水谷紐育新報社長や日本人会幹事其他と共に先般尾崎行雄氏に四万円斃されたといふ僕と同県出身の塚

田敦平氏のミヤコで歓迎会をやつて呉れた。塚田氏は僕の三度目の渡米の時には、こゝで新潟県人全部を集めて僕の歓迎会を催して呉れた。角田君は新渡戸博士は色々の噂が立つ爲めにコロンビア大学の政治学会の講演は辞はられたが、僕にやつて貰ひたいといつた。僕は満洲事變は、不戦条約の成立後でもあり、第一次大戦後十年余も立つて、世界が最も平和の時に起きたので、宣伝もあり、誤解もあり、米人は領土的野心に基づく侵略なりと解釈してゐることが、当方へ来て解つたから、弁明の余地がないと辞退した。僕が前年満洲を視察した時に比して、事變の伸展が事變の性質を變貌してゐるやうに感ぜられ、僕の「昭和維新」の著述で發表した持論と一致しないやうになつてゐた。

ニューヨークでは三菱商事支店長風間君、三菱銀行支店長須賀君、三井物産支店長石田礼介君(この人の岳父の故福井菊三郎氏が紹介状を呉れた)の

の中学時代の荒野君がソルボンヌ大学在学中相思の仲となつて今荒野夫人ジョージェットとなつてゐるので、荒野君を通じて堀田君のことは聞いてゐた。僕の名が演説の爲めに加州のいくつかの新聞に載つてゐたので、氏は特に僕を招いて、日本人会に演説させ、更にもう一席といふので、労働者を中心とする別の日本人会に演説を依頼した。弁護は「分離運動」と「自治運動」で侵略運動でない、日本の実力を離れて満洲に「安定」と「繁榮」がないという一点張りである。後の会合の時には、氣狂ひじみた共産黨員といはれる某日本人が噴衆席からピストル様のものを出して僕を威嚇した。借金度胸や女度胸はない方だが、演壇度胸だけは人並はずれで、一度演壇に立てば、伯樂が牛馬を見るが如く、名士も反対党も羨まない方であるから、黙つて相手を見てゐた。ところが開巻を容れず、佐賀の人だといつたが、鬼倉某君が演壇に飛び上つて、弁士に害を加へれば

世話になつた。殊に須賀君からは相当米人の与論を伝へ聞くことも出来たし同君の案内で禁酒時代から、ドイツ人の溜り場でジョッキの満を引くことが出来た。

六 ポストン再訪

紐育を早々切り上げて、一年もゐた古巢のポストンに行つた。パセデナのビン師の親戚のエマーソン君の宅に泊ることが出来た。同君はポストン・グローブの記者である。ポストンあたりへ来て日本人がこうゆう人の家におられるのは一つの特権であつた。同君はグリーン思想に共鳴する徹底和平論者であつた。毎日食事を共にしながら、満洲問題を論じ合つた。僕を軍国主義者とは認めなかつたが、当時の一般日本人は世界平和の攪乱者であるとの信念は断じて動かさなかつた。彼は米國も過去には相当悪いことをやつたが、一度不戦条約を作つた後は如何なる名義でも武力を行使することが悪

いといつて退かない。僕は多くの日本人は、米国へ来れば、日本の官僚、軍閥を攻撃して、自分のみが例外的日本人であると吹張り、日本へ帰れば、口をぬぐうて知らぬ顔をし、甚だしきは軍閥、官僚に阿諛、追従する連中を陋とするものである。僕は少々つむじまがりであるから、外国にある時は出来るだけ本国を弁護し、日本内地では支配階級に衝突し性格である。前者を見れば、僕は日本政府の代弁者の如く、後者を見れば、反政府、反軍閥ということになる。何れにしても、満洲事変後の対日感情は非常に悪化してゐることを、新渡戸博士同様、身を以て体験した。僕のハーバート留学当時は第一次大戦の末期で、日本は米国の与国であつた。満洲事変後の日米間とは非常に相違があつた。

学生当時世話になつたニコルス夫人が旅行から帰つたので、直ちに訪問した。夫人の勧めもあり、ボストン在住の東洋にゐたことのある元外交官十名

かと聞いたら、貴君をあそこへ連れて行くのだといふ。行きつくと銀の茶道具で、茶の馳走である。隣りは支那室である。この家は城のようだといへばオランダの城を買つて来たのだといふ。庭へ案内されたので、ヴェルサイユみたいだといつたら、ヴェルサイユ宮殿の庭を模倣したといふ。二列の大理石の彫刻がある。之はヴェニスから買つたのだといふ。山の上から眼の見へる範囲は皆私の所有物だといふ。遠くに島がある。あれも自分の物だといふ。海水浴場もある。公開してあるが毎日二千人くらい来るといふ。自動車は雇人が多く廿六台備へつけてある。暫らくすると婿夫婦が来た。婿は有名なブラット提督の息子で自分の娘が嫁したのだといふ。丸で日本の富豪などには桁違ひだ。夫人の遺産一億弗中半分は社員に分ち、夫人は一億弗を買つたとのことである。夫人が大の親日家であるのは、若い時父に連れられ、日本に遊び、大隈伯と大倉男に馳走にな

近くをスタッドラー・ホテルに夫人の推薦で僕の名で招待した。ボストン美術館の東洋部主任の富田幸次郎君夫妻も見へた。雑談の間にも、日本は軍部の圧制から解放されねばならぬといふ意見に一致してゐた。一般の日本人は依然として好感を持たれてゐたが、日本の支配者は疑念を持たれてゐた。米国東部にゐる日本人は比較的有識者又は有階級であるから、個人としての日本人は米人から好感を持たれてゐた。しかし、日本の国策は世界にトラブルを生ずるといふことは米人の一致した意見である。当時の流行語はトラブル・メーカー（騒動製造人）といふ語であつた。

僕はローウェル総長を訪うて簡単な話しをして、先般新渡戸博士と会食した話をやつたら、喜んでゐた。そうして大学秘書グリーン君に会へといつた。グリーン君を訪ね、僕の前歴と、目下美術学校の校長をしてゐることを話したら、流石は美術愛好者の多いボスト

つたのが縁だといふ。大隈伯は大きな声で笑つたことが今でも記憶に残り、大倉男の支那料理の馳走がうまかつたといふ。僕は此の話を聴いて、日本でも大隈のような大市民が必要だと痛感した。

帰り途にマンチェスター町でブーバー夫人の宅で夕食を馳走になつた。夫人はハーバート法律大学の理事長であつたといふ。夫人は元駐日大使グルーさんの従妹だとの事で、帰国したらグルーに会いなさいといつた。しかも無精の僕は遂に昭和七年のこの年から十六年の日米戦争の日まで会はなかつた。何となく残念である。

ボストンには二ヶ月滞在し、午前は教授クラブで雑誌類を読み、午後ボストンで絵を見た。エマソン君の紹介で幾人かの新聞記者に会つたが、何れも日本に悪かつた。僕は之から渡欧するが、ゼネバの国際聯盟の会合で日本は苦境に陥るなど予感押へ難きものがあつた。加州で在留日本人間で演説す

ンである。グリーン君は今度ハーバート教授クラブが出来、そこで新刊の新聞雑誌が読め、食事も出来愉快なところであるから、貴君の滞在中は臨時会員にしてやりませうといつて呉れた。排日の本場といはれるところで、如何に親日派といはれるグリーン君でも僕には意外の待遇であつた。今の東大教授の岸本君は当時インスタラクターであつたが、まだ会員にさせられなかつた。岸本君を訪ねて、禁酒時代には珍しいブドー酒を御馳走になつた。

第一回の留学の時色々世話になつたフィスク・ロレン夫人は夏期アイルランドへ行つてゐたので、ニコルス夫人のみに世話になつた。夫人はニューヨークランド七州第一の別荘といはれるクレイン・コンパニイ社長の未亡人の夏の別荘へ連れていつた。家はイブスウッチにある。先づ車で同地の妹君のニュークリフ夫人の夏の別荘に寄り更にクレイン夫人宅へ行つた。遠くの山に城のような家が見える。あれは何

れば、いゝ氣持になれるが、東部へ来て見れば、排日の空気は強い。新渡戸博士のあの憂鬱そうな顔付は無理もないと同情された。あれほど米人の信用があつた人であつて見れば、本国が何となく裏切り者のように思へたであらう。日本は満洲の治安と繁栄の爲めの軍事行動に限るべしといふのが博士の述懐であつた。僕は愈々渡欧して、颯風地帯に入るのである。ニコルス夫人の紹介で日本に来て、僕の家で杉森孝次郎君と一緒に飯を喰つたニューヨーク在住のラチオ解説者に会つて意見を聞く積りであつたが、生憎旅行中だったので、残念であつた。兎角、盛夏は米人で名士に会うには不適當である。

(未完)